大衆文学大系

8

矢田挿雲
松田竹の嶋人

監修＝大佛次郎　川口松太郎　木村毅

講談社

大衆文学大系8　矢田挿雲　松田竹の嶋人　集
昭和四十六年十一月二十日　第一刷

著者　矢田挿雲　松田竹の嶋人
装幀者　田中一光
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―十二―二十一　郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)　振替東京三九三〇
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　大製株式会社
定価　二八〇〇円
©矢田信子　一九七一年
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

0393-136082-2253 (0)　(文2)

目次

矢田挿雲集
江戸から東京へ　五
松田竹の嶋人集
黒駒の勝蔵　四三
解説　八三
解題　八九
年譜　八三

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

矢田挿雲集

江戸から東京へ

麹町区

道灌築城当時の江戸

東京府庁の正玄関に近く据えられた太田道灌、徳川家康両雄の銅像は以前の石膏細工とちがい、東京のあらんかぎり、鼻が欠けずに伝わるであろう。日本武尊が、

「吾妻はや」

の哀音に清怨尽きやらぬ、この地方の総称をとどめられた二千年の昔から、在五中将業平朝臣が、隅田川の水鳥に向って「我思う人」の安否を尋ねた頃にかけては、東京もなければ江戸もなく、ただあるものは一望漠たる草原と草から草へ出没するお月様と、それに今一つは、恋にやつれた好い男の公卿に、突然変なことを問いかけられ、ことごとく面喰って水にもぐった水鳥があるばかりであった。もっとも隅田河畔で、業平が溜息をついた時から、百五十年ほど前、武蔵守といって、今の東京府知事に、東京衛戍総督を加えて、少し膨らましたくらいの役人が、初めて平安朝廷から設けられたが、その役所の所在地は、江戸ではなく、北多摩郡府中駅であった。この点では東京はいくら威張っても府中に頭が上らない。興世王を初めとして百足と平将門を退治た俵藤太秀郷、また頼朝から、時の模範官吏として表彰された平賀義信など、代々の国守はすべて府中にいた。北条泰時が、天下の執権と武蔵守を兼ねながら、不精をかまえて、鎌倉にばかりいたから、府中は自然廃庁になったが、それに代って頭をもたげたのは決して江戸ではない。北条歿後、足利尊氏もその子義詮も、鎌倉にいて武蔵一円を支配し、爾来基氏、持氏、上杉憲実等をへて、渋川義鏡か、探題のときは蕨におり、持朝は川越におり、江戸はなお依然として、草と海と漁家が点在するのみであった。

江戸に初めて都市の端が開けたのは、長禄元年四月八日（五百年前）太田道灌が江戸城を築いて後のことである。当時の城は、徳川時代以後のものに比ぶれば、至って、粗末であったが、中城、子城、外城を築き、石墻を高うし、濠を深うし、要害堅固の湯池であった。今でこそ東京人は川越には、甘藷より外に用はないような顔をしているけれど、道灌が築城した頃は、土地に人間がいないので、川越から工夫の供給を仰ぎ、僅僅百日のあいだに築き上げた。道灌が入城してのちも、川越は地方文化の中心で、風俗、言語すべて川越を真似るのが、ハイカラだったから、東京人は川越に対しても頭が上らない。そのかわり城をつくる土石はいくらでも手近で得られた。今の東京が人間ばかり多く、石ころ一つ自由に得られないのとは正反対である。

道灌の有名な歌に、

「我庵は松原つゞき海近く、富士の高嶺を軒端にぞ見る」

とある松原は、今日の大手町、永楽町、東京駅の辺で、それから局沢、即ちかつての参謀本部に面する、吹上御苑の方面へかけて、鬱蒼たる松林が海にのぞみ、道灌の築城後、漸次その間へ各宗の寺院が建てられた。その松は御覧の通り今は一本もない。参謀本部前の弁慶濠の堤に純日本式の風致を添えている松は、すぐに千年の翠滴りなどと書かれるけれど、これは道灌のズッと後、享保年間に植えられたもので、二百余年の翠が滴っているばかりである。当時秀吉や家康が江戸へきても、相当の家がないので、平川村の法恩寺へ泊ったものだ。徳川の世になってから、法恩寺は方々へ移転した。いま本所区太平町一丁目にあるのがそれである。

太田道灌の築城術は、後世、秀吉が江戸城を検分して舌を捲いたほどだから、鮮やかなものには相違なかったろうが、今日の皇城には当時を偲ぶ何ものもない。ただ和田倉門の北にあたる内桜田門の屋根瓦に、道灌の家紋の桔梗を打出して、桔梗門の別名が残っているのみ。しかし桔梗門内なる近衛司令部や、内閣文庫や、毎夏蓮が見事にひらく中央気象台の濠をへだてて、巍峨たる城の石垣を仰げばまことに感慨の深いものがある。明治四年九月九日正午以来市民に正午を報じた午砲台のある少し北よりが、即ち旧江戸城の本丸として、天主閣の聳えたところ、天主閣は江戸二大火の一なる明暦の大火に焼落ちたが、その辺一帯には伏見桃山の伏見城から移した伏見櫓だとか、八方正面の富士見櫓だとかいうのがあり、それ以前の道灌時代には静勝軒、含雪斎、泊船亭などというひねった名前の四阿式小房があった。泊船亭は日比谷公園のほとりまで船が着いたからの名、含雪斎は軒端に富士を眺めたからの名、簑のかわりに山吹の花で百姓娘にからかわれたのが口惜しいとあって、凝り性の道灌、兵馬のひまにそこで詩歌の筵を開き、大いに詞藻を練ったが、歌はいたって月なみだ。

安藤対馬と井伊大老

明治元年四月十一日、十五代将軍徳川慶喜公が、徳川二百八十年の城池を朝廷に奉還し、同年十月、明治天皇京都御発輦御入城、一たび御還洛の上、翌二年三月二十九日、再度の御入城をもって事実上の奠都を断行せられ、同六年五月、端午の日に皇居炎上、赤坂離宮の仮皇居へ成らせられ、爾来十二年が間造営の御許しがなく、明治十七年、初めて建造に着手、二十一年十月竣工、二十二年一月十七日をもって、めでたく新皇居へ帰還されたのが、現在の皇居である。当時の造営費三百万円、建坪一万二千七百三坪、その後また増築ありて千代田の翠いよいよ濃かである。新皇居造営の頃、全国各府県から献上の木材を、紅白美装の牛にひかせ、朝風に幣を吹かせて、勇ましく大内へ練込んだ太平の象を、七十以上の人はみな覚えている。二重橋及び二重橋前は、世界に於ける美観の一であるが、旧幕時代の二重橋は木造で、西丸下乗橋ととなえ、橋の欄干には慶長十九年甲寅八月と銘刻してあった。

慶長十九年は家康入城数年の後、初めて旧江戸城を修築せしめた年であるが、どうかすると西丸下乗橋の外に、幕臣が丁髷をそろえて撮した写真が、今も残っていて、それを見るととても今日の美観はない。明治天皇御大切のみぎり、国民が二重橋外の炎砂に跪坐して、御平癒を祈った忠誠は世界が感歎した。坂下門は今も昔のままである。もっとも今は元老、大臣などが自動車で参入し、門内突当りには宮内省、内閣、枢密院の建物があり、左へ坂を登れば皇居東車寄の参内口で、帽影剣光、勲

章綬章が絡繹出入の状と、文久二年正月十五日の登城に、その頃ハイカラの急先鋒であった安藤対馬守が坂下門前で、裃の背中から斬りつけられた光景とを対照すれば、門こそ同じだが隔世の感がある。対馬守が斬られたまま登城し、鮮血淋漓として執務したのはちと乱暴だけれど、今日の役人にそれ程の気概ありやなしやを、ちょっと隅田の都鳥に聞いて見たい。

「落花紛々雪紛々……白昼斬取大臣首」とくれば、紅葉のあるのに雪がふる以上の美観で、桜田門外の大詰は芝居に江戸絵に興が深い。その日――というのが万延元年三月三日、品川の妓楼相模屋で白鉢巻に饅頭笠、赤合羽の勢揃いをしてくりだした佐野竹之助、蓮田市五郎等の水戸浪士十六名に、薩摩藩士の有村治左衛門を一枚加えたテロ団が、桜田門外の今は空地になっている、その頃の松平河内守邸前に、節句登城の行列でも見にきたような顔をして埋伏せりとも知らず、午前九時頃、参謀本部の前身なる井伊邸の正門をさっと開いて、大老格の行列が、粛々と掃部頭の乗物が、雪を蹴って一文字に今の電車丁字路のほとりまでくると、バラバラ駆けよった浪士連、駕わきの侍と二三合の後、駕ぐるみ掃部頭を田楽刺しにして屍骸を引摺り出し、有村が逸早く首を掻いて、袖にかくし、詩を吟じつつ警視庁の方へ――といっても当時あの辺から神田橋、小川町、駿河台へかけて大名屋敷、旗本屋敷の連続で、交通巡査に見咎められるおそれもなく、今は帝国劇場になっている毛利大膳太夫の邸前までくると、ここまで尾行してきた駕わきの侍の小河原秀之丞が、有村の背中へ斬りつけた。それを二三の浪士と返り討にして、有村は和田倉門の真向うなる遠藤但馬守の門前まできたが、もはや駄目と知って、門前で自刃した。今では松田前法相の銅像が、司法省の角から当年の跡を、感慨深く眺めている。桜田門は、そのときのままの姿である。

大隈外相の遭難

桜田門前の弁慶堀は内濠第一等の眺めで、水に伏す芝塘の松、安全地帯に夢円かなる鴨、鴛鴦、いずれか聖代の象ならざるはなく、またこの方面から半蔵門へかけての宮中は、吹上の御苑とて、万機御統覧の暇に聖上の玉歩を運ばせらるるところ、その南詰の三角矢来をへだてて樹林の空に仰がるる振天府、懐遠府は、明治天皇が日清日露の戦死者を篤く思召しおかれたところである。橘南谿によれば「諸国に吹上の浜というは数多あり、海風荒く遠浅の浜に白沙を吹上ぐる地をいず方にても吹上と名づくるなるべし」

とあって、御苑に噴水があるからというわけではなく、道灌時代には局沢と称した海浜のあとである。参謀本部から霞ヶ関一帯の高地は、徳川の初め頃は、今よりもズッと高く、かつその山脈は山下町、即ち帝国ホテルの辺まで延長し、山脚と山脚との谷間へ、潮が差引したり吹上げたりしたものだ。西洋人にいわせると、参謀本部の高みから日比谷公園の眺望が、東京一だそうだが、して見れば有栖川熾仁親王の銅像は、最も景勝の地に立っているのである。熾仁親王は江戸に奥羽に錦旗を翻して、西郷その他の功臣とともに維新の大業をとげ、日清役には錦旗に随って広島へ御進発、翌二十八年一月舞子御別邸に薨去、六十一年の生涯を全然国家への尊き奉仕に献げ、今や馬上の英姿颯爽として帝都を護らせ給うのである。参謀本部が維新前井伊掃部頭の屋敷だった頃は朱塗の門であった。掃部頭は今生きていれば「赤いネクタイの会」の会長とでもいいそうな赤好きで、兜も鎧も赤く塗り、井伊の赤鬼、赤備といえば鳴らしたもの。彦根から江戸詰になっても、赤隊の昔を忘れず、屋敷の門まで赤くして、喜んでいた。

外務省門内、陸奥朔刀大臣の銅像が立っている辺は、鎌倉時代、鎌倉街道に設けた霞ヶ関のあとで、旧幕の頃、福岡藩主黒田侯の屋敷をおかれたところ、当年の大名門は鉄門とかわったが、昔ながらの海鼠塀は、坂を一つ隔てた広島藩主浅野侯の屋敷と、壮麗を競っただけあって、今も時代錯誤の美観をとどめている。外務省に絡わる喜劇は多いが、悲劇の筆頭は、明治二十二年十月十八日、大隈外相の遭難一件である。その日午後三時頃、大隈外相の馬車が外務省を辞して今しも門外に出でんとした一刹那、福岡の壮士来島恒喜は爆裂弾を侯の馬車に投げて、その隻脚を飛ばした。侯の血を流したのは恰度鉄門前の石畳の上である。

あれから海軍省、司法省、日比谷公園へかけては上杉、鍋島、毛利、板倉等、諸大名の屋敷がつづいていた。府立一中の辺は家康入城の際、毛利輝元に、また日比谷音楽堂の辺から、西洋花壇へかけては、伊達政宗に与えられた敷地で、それぞれ厳めしい屋敷が建っていた。今ではこの辺は東京の中心であるが、政宗や輝元が頂戴した頃は霞ヶ関の方から斗出した山脚へ上げ潮が灣入し、海苔採るヒヾが立っている谷だから、ヒヾ谷だろうという考証さえ行われているくらいの潟であった。政宗等はこの干潟には閉口したが、弁慶濠（参謀本部前）の幅が十間に満たないのは不用心でしょうとお為ごかしの開鑿工事をすすめ、その揚土をもらって潟を埋めて屋敷を建てたのである。維新後日比谷ヶ原と変って、ながい間近衛の練兵場となり、明治天皇は毎年観兵式を行わせられたが、明治二十六年、日比谷公園の設計に着手し、三十六年六月一日から開園された。面積五万五坪、心字ヶ池の石垣は、日比谷門の礎石である。

鹿鳴館の仮装会

日比谷公園は新しい割には種々の記録を有し、なかんずく明治三十八年十月五日、ここに催された日露屈辱講和に憤慨せる国民大会の崩れが、内相官邸（今は帝国ホテルの地内）焼打、電車焼打、交番焼打、巡査の抜剣、戒厳令発布となって、帝都の秩序が紊乱し、現場を目撃した新聞記者が、

「警官は、ただ今馬脚をもって、さかんに人民を撫しつつあり」

と貼り出した。四十三年十月十五日、伊藤公の国葬なども記録の一つである。電車道を隔てて謹厳な黒門は昔の装束屋敷、今の華族会館、門の位置は今の勧業銀行正門のところにあったのだが、門そのものは昔のままで、細川侯屋敷跡なる高輪御殿及び本郷前田侯の赤門とともに、東京に残された大々名の門三絶である。旧幕時代に琉球から朝貢した使臣は、管轄の関係で薩摩邸に入り、装束を着換えて登城したから、薩摩邸一名装束屋敷と呼ばれたが、明治十五年以後、欧米心酔時代の鹿鳴館となり、再転して今の華族会館となった。

鹿鳴館の仮装会とて谷干城、三宅雪嶺等の国粋保存党に攻撃されたのは、明治二十年四月二十日の催しである。その日の仮装会に井上外相は毘沙門天、山県外相は小具足、長柄の槍を抱えて萩原鹿之助、大山陸相は羅紗の羽織に野袴をはき、天性の無器用で別にいうことがないから、時々人混みの中へ立ちどまり、天井を仰いで、

「私は薩州の大山弥之助でごわす」

と大呼してはまた歩きだす。下田歌子女史は源氏物語の夕顔となって、内外顕官を悩殺したあげく、伊藤首相の腕にもたれて卒倒し、大蔵省の役人だった渋沢男は、令嬢琴子、今の阪谷夫人を山吹の里の少女に仕立てて、自分は狩装束の太田道灌に化け、伊藤首相令嬢末子、今の井上勝之助夫人と、同生子、今

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

の末松夫人とが腰簑をつけて、松風村雨といった狂人沙汰、かれも夢これも夢、その後身が今の華族会館で、館長徳川家達十六代将軍は、自動車全盛の世に、相変らず鉄輪の二頭馬車を轆轤と軋りこむ。

紀尾井坂の刺客

一時埋立問題の沸騰した赤坂見附の弁慶橋を、清水谷公園の方へわたったところの右方が紀州邸、左方が井伊掃部頭邸、それを登りつめて、紀尾井坂を隔てゝ、井伊邸と相対するのが、尾州邸であった。紀尾井町の名のおこりであるが、今の伏見宮邸が井伊邸の跡、北白川宮邸が紀州邸の跡、竹田宮邸と墺国公使館が尾州邸の跡である。井伊邸の前は、参謀本部の所も伏見宮邸も、共に加藤清正が家康から貰ったもので、前者は皂角を植えたために皂角河岸の名で現われ、後者は千畳敷で名高かった。明治十年谷干城が熊本籠城のさい、壁土の中から、清正が塗込めておいた薩摩葦を発見して、煮て喰ったら不味かったという話は、青木昆陽先生の時代を無視した大ヨタだが、清正公が家一つ建てるにも仮想敵を目標としたことは事実で、さすが参謀本部の前の店子たるに恥じない、紀尾井坂の屋敷も、応接間の障子の桟に鉄骨を通したり、内からは開かぬ枢を仕掛けたり、物騒千万な工夫を凝らしたが、それも寛政四年の火事に焼けてしまった。

明治十一年五月十四日午前九時、時の内務卿大久保利通公は霞ヶ関の邸を出て、赤坂離宮の仮皇居へ参内すべく、馬車に搭じていわゆる紀尾井坂を降りて、恰度清水谷公園のある向う側のところまで来ると、島田一郎、外六名の壮漢が白シャツ露わに躍り出て、長刀をもって馬脚を薙ぎ倒し、馭者台に腰をぬかした馭者が、

「ぶ、無礼者」

といい終らぬうちに飛び上って斬り殺した。車中で公文書を閲しつゝありし大久保卿は一言、

「待てッ」

と叱咤しておもむろに文書を捲いて文筥に納めてから、車外に降り立ち格闘したが、赤手の上に衆寡敵せず、四十九歳を一期として敢なく路草の上に斃れた。変を聞いて真ッ先にかけつけた西郷従道は、その前年兄の隆盛を城山の露と散らし、今また多年の先輩たる甲東を刀の錆として、恨恨多時、懇ろに遺骸をおさめて大久保邸に送った。大久保甲東を殺した刺客は、甲東が西郷南洲を殺したものと思っているのに、南洲の弟の従道が、甲東の遺骸をおさめたのである。牧野伸顕男は、その頃二十一二歳で、痛恨骨に徹したが、伊集院大使夫人の芳子さんは、数え年の三つだから、頑是がなく、弔問客で賑うのを喜んだ。剛胆な内務卿は、形勢の不穏をうすうす感づきながら、短銃一挺用意せず、護衛巡査も呼ばず、ついにこの遭難を見たのである。墓は青山にある。同十八年に開いた清水谷公園は、面積三千七百坪にすぎないが、上品で幽邃で、ことに大久保公哀悼の碑は行人をして低徊去るに忍びざらしめた。

平河町の閑院宮邸は、松平出羽守、即ち茶道でひゞいた雲州侯の屋敷跡で、表門は昔のまゝの見事なものである。しかし徳川三百年を通じて、最も壮麗を極めたのは、三代将軍家光の時に出来た、蒲生家の表門である。門柱には下り藤を彫り、扉には支那印度の人物を彫り、金銀を鏤めて燦然人目を眩するばかり、のち蒲生家が絶家して、酒井忠勝の邸となったが、明暦の大火に焼けて、跡方もなくなった。その場所は、ほぼ今の東京駅前海上ビルジングの辺である。海上ビルジングが東洋一の東京駅と対峙して、新東京に於ける偉観を保てるは、深き因縁の

あることである。

大蔵省と天慶の乱

大蔵省が平将門および先代萩と密接の関係があり、江戸ッ子の大半が、平将門の子孫であるといっては、少しいいすぎかも知れない。それを語る前に、大手町停留場で電車を降りて、大蔵省の門内を窺いて見ると、すぐ眼の前に古風な庭園があって、三百坪ばかりの蓮池には浮葉が茂り、その南方内務省よりの老樹鬱蒼たる下に一個の塚がある。これは昔から将門の首塚と称え来ったもので九百七十余年の由緒がある。宇治拾遺や日本外史では将門は皇位をねらった逆臣ということになっているが、これは江戸ッ子の祖先を誣ゆるの甚だしきもの、所謂天慶の乱の起因は、将門の伯父国香が、将門の父から預かった遺産を将門に渡したくないためと、源護の伜どもの目指していた美人が、将門へ嫁いだためと、いま一つは当時の武蔵守源経基が将門を誤解して、朝廷へ讒したために起った色と慾と権勢上の私闘にすぎない。源経基とか六孫王経基といえば、ひどく豪そうだが、実はすこぶる官僚主義の小人で、赴任匆々江戸土着の名門、武蔵大掾武芝と衝突したのを、将門が心配して、武芝を経基のところへ連れてゆき、和解の宴を開いている最中に、今度は武芝の従者が経基の家来と衝突してはり倒した。小人の経基、これは土着同士の武芝と将門がぐるになって、自分を迫害するものと気をまわし、京都へ駈込訴訟をしたが、武蔵権守の興世王すら、長官の経基に心服せず、将門の方へついたくらいだから、経基の不人望も察せられる。不幸にして将門は秀郷の箭にたおれ、首は京都に上され、遺骸は郎党が下総国猿島郡からになってきて、右の首を取かえしてつなぎ合せる計画だったが、結局あきらめて、武州豊島郡芝崎村日輪寺境内に葬むった。

芝崎村は大手町から神田橋辺の地で、日輪寺は今を去る千余年前、僧了円法師が建てた天台宗の古刹である。すなわち日輪寺創立後百年ほどして天慶の騒動がおこり、まず将門の胴体をこゝに埋め、程経て京都から貰ってきた首も併せ埋めたのが、即ち現在の将門塚である。国賊の汚名を雪ぐに由なき将門の霊は瞑することが出来ないので、しきりに天変地妖疫病などを流行らせたので、第二世の遊行上人真教坊が徳治二年（約六百年前）東行のみぎり将門に蓮阿弥陀仏の法号を贈り、塚のそばへ碑を樹てゝ篤く葬むった。そしてその塚を筑土明神と崇め、塚の前に祠堂を建てゝ神田明神と称えた。神田明神は後に神田橋外、神田山（今の駿河台）湯島台と転々として、現在の宮本町へ鎮座するに至り、日輪寺は芝崎町の名を背負って浅草寺附近へ転じた。浅草芝崎町の名の起りである。九月十五日、神田明神大祭の前夜、日輪寺の住職が社殿に参籠看経するのも、藤沢の遊行上人が上京すれば、イの一番に神田明神へ参拝するのも、この縁故に基くのである。将門塚のそばの蓮池も、大蔵省の池などといってしまっては曲もないが、昔は神田明神の御手洗池といって、禁漁池であった。今でも塚に近い方の水中に、将門の首を洗った古井戸のあとが残存して、水が減れば見える。日輪寺の池といわずに、神田明神の池というところから察するに、初めは平地に井戸があったのみで、塚が出来たのち池を掘ったのであろう。

女房子供を質に入れて、神田明神の山車を気張る江戸ッ子のうちにも、祖先の将門を逆賊と心得ているのがある。江戸ッ子の名誉のため、かつ宮内省の借地内に、将門塚をあがめ祀っている大蔵省の名誉のために、大いにその蒙を弁じたい。そして今後は江戸ッ子の血と、神田明神との関係についての正確な知

識を江戸ッ子にもってもらいたい。将門の歿後、女婿忠頼の孫忠常、忠将を経てその支脈が相馬御厨、相馬中村、武蔵、小田原、千葉の辺へ非常な勢いで繁殖し、所謂相馬平氏は眷族二百数十姓の多きに及び、なかんずく江戸は相馬民族で占め、江戸太郎重長はその頭目だが、神田明神の社司芝崎氏、四谷天王の社司芝崎氏、筑土明神の神主筑土氏など、江戸の旧家はすべて相馬平氏の血筋を引き、府下に何々明神というはことごとく先祖の将門を祀ったものである。もっともその後祭神を取代えた不見転神主もある。神田明神でさえ、永い間京都へ遠慮して、祭神の開帳を差控えていたものだが、徳川氏の世になって（寛永二年）烏丸大納言が下向のみぎり、ちょうど東京駅前にあった伝奏屋敷に宿泊し、公務の余暇にその頃須田町と称した大蔵省内の将門塚と、宮本町の神田明神とを訪れて感ずる所あり、帰京ののち奏上して勅勘赦免を請い、翌三年下向の際、有難き聖旨をつたえ、盛大な准勅祭が行われた。それ以来祭神の開帳は公表になったものの往々将門を逆賊呼ばわりをするものが絶えなかった。それを牛込払方町の老儒織田完之翁が口惜しがって、将門雪冤の大運動を起し、文科大学を動かし、宮内大臣を動かし、枢密顧問官松方伯を動かし、大蔵大臣を動かし、ついに明治三十八年、前の芳川内相をして将門事蹟の正伝たる将門記伝を国宝として発布せしめ、将門雪冤の自著を乙夜の覧に供し、明治四十年二月、将門塚の頂上へ松方伯題字、大蔵大臣阪谷博士撰文の故蹟保存碑を押立てゝ、将門の断じて逆臣にあらざる旨を立証した。大蔵省は、須らくその庭園を東京市民に公開し、東京市民は、祖先の墳墓として、大々的にこの首塚を祀るがよい。

須田町という町名の起因は異説区々であるが、この町は初め将門塚のあたりにあったのを、城内取拡げのため現在のところへ移されたらしく、須田町といえば広瀬中佐がほこりにむせる所と相場がきまり、将門以来の古き由緒を知る者もない。ただ連雀町一の一乾物問屋小栗万次郎氏の家は、先祖代々神田明神の氏子総代として、神主芝崎氏とともに由緒深い家柄である。前記真教上人の建てた「将門蓮阿弥陀仏」の名号碑は一旦湮滅したが、幸い文化二年に芝崎道場日輪寺の住職が、家運繁昌の護符として名号の石摺を小栗家へ贈ったのが家宝として伝わり、明治四十年、当主はさらに碑に覆刻して、将門塚の麓へ建てた。小栗家の祖先は小田原藩の客将相馬胤盈の一門で、江戸へ移住後は祖先の祀れる神田明神へ日参の家例を定めた。猿楽町はいうまでもなく神田明神に奉納猿楽を催した名残で、太田道灌も徳川家康も、何よりもまず江戸の古神たる神田明神を尊崇した。将門塚の転化なる筑土明神は、今は牛込にあって将門の木像と首桶が宝物である。日本橋兜町の名は、秀郷が罪亡しに将門の兜を供養したのが起因、渋沢男爵邸横の楓川にある兜神社は、その兜を埋めた上に建てたもの、その外将門を記念すべき神社は、常総武相に瀰漫して江戸民族の血縁を語る。将門は勇将で仁将で、三十八年の生涯は詩であった。江戸ッ子は将門を忘れてはいけない。

（大正十二年の大震に将門塚は湮滅して、大蔵省の建物をその地点に延長して以来は、長官級の夭折するものが相つぎ、大蔵省主催の将門慰霊祭を行った。なお神田明神祭礼の際は、御輿が特にこの大手町の大蔵省までまわり、また大蔵省では御神酒をささげるのが永く恒例であった）

大蔵省と先代萩

日輪寺と神田明神が別れ別れに立退いた跡を、慶長年間家康から土井大炊頭に与え、世人は神田橋を大炊頭橋と呼び慣わし

たが、将門塚は依然邸内に存し、四代将軍家綱の時、土井屋敷が下馬将軍酒井雅楽頭屋敷になった頃には、奥女中の信仰浅からず、将門稲荷の名で崇め奉り、連名彫刻の玉垣を寄進し供物神燈を絶やさず、毎年祭礼日には神田明神の社司を招いて祝詞を捧げたものである。その御利益でもあるまいが、酒井忠清の権勢は飛ぶ鳥も落ちんばかり、大手門外に樹てられた下馬札のわきの将軍家という意味で下馬将軍と呼ばれたほどであるが、謹厚の能吏も私情には脆く、娘婿の愛にひかれて伊達騒動の際には失態を演じた。伊達政宗は十番目の末子の宗勝に世を譲りたかったが、世間体そうもならず、次子忠宗に世を譲ったところ、忠宗歿し、綱宗立つや、一の関の分城に不平を抑えていた宗勝は、奸物原田甲斐と共謀して、綱宗を吉原に耽溺せしめ、蔭から幕府にこれを披露して隠居させ、僅か二歳になる亀千代を立てゝこれを毒害しようと計った。宗勝は伜市正に酒井雅楽頭の娘を配し、酒井の威光を笠にきて横暴な政治が多いので、忠臣伊達安芸は片倉小十郎と相談して、妹の政岡（実名浅岡）を亀千代君の乳母として麻布の邸に住まわせ、壮士松前鉄之助は床下に潜み、鉄扇をもって鼠の額をうったのが仁木弾正に感応し、芝居の見物を煙にまくこととなり、浅岡の一子千松は、

「忠義をして了うたら」

飯が食べられると楽んだ甲斐もなく、検毒にたおれて浅岡の大愁嘆場を現出した。しかも綱宗は一切夢中、高尾の体量を小判ではかって受け出した上、永代橋の下まで来ると、髪をつかんで吊し斬りにし、河畔の高尾稲荷と「男が好うて金持でそれで女が」という唄に古往今来片思いの横綱を張っている。伊達安芸ついに七ケ条の失政をあげて幕府に訴え、五代将軍綱吉は、執政板倉内膳正に命じて伊達安芸、原田甲斐を対決せしめ、酒井雅楽頭は原田甲斐のためにすこぶる取做したけれど、板倉内膳正さらに取上げず、テキパキと黒白を別けた。

時は寛文十一年三月二十七日、酒井邸の大広間に於て、理に詰められた原田甲斐は辞に窮して、退出すると見せかけ、

「これも貴様のためだ」

と叫びざま伊達安芸の背に斬りつけた。安芸は直ちに一刀報いたが、深傷のため碌に斬り得なかった。甲斐は第二撃を与えた上に、板倉をも刺すつもりで奥の間へ進もうとするところを諸士にさえぎられ、乱闘の末斬り殺された。その時の対決の間は今の内務省のある辺で、それから中庭をへだてゝ御守殿ととなえた夫人の奥部屋が大蔵省のところへ建っていた。最高審判所なる評定所は辰の口、即ち和田倉門の向側にあって、伊達騒動の対決はそこではなく、被告を弁護したがる雅楽頭の屋敷で演ぜられ、原田甲斐の振まわした刃の跡が鴨居や柱に久しく残っていたという。当時徳川から降嫁した夫人のことを御守殿様と称え、その家を御守殿屋敷、庭を御守殿庭と称え、女中腰元まで一切徳川大奥の通りの風俗で、御用人役の白髪爺の外は、終生男禁制の掟やかましく、わずかに庭を逍遙するくらいが、最も自由な解放であった。（但し裏には裏がある）大蔵省の庭も所謂御守殿の一つであった。

刺青だらけの町奉行

大手門と竹橋門との間に、平川門といって死人や罪人を出す不浄門があった。太田道灌はこの方面から大蔵省、雅楽頭屋敷、土井屋敷以前の神田郷芝崎村の松原を眺めて、

「我庵は松原つゞき」

とひねったのだが、松など一本もなくなり、これでは暑くていけませんと、明治初年に津田仙が大久保内務卿に勧めて、楊櫪の才といって、支那では貶している楊の樹を平川門附近の濠

端に植えたら、一本々々枯れて、今は内務省の裏に二三本残存している。これが明治年間における街路樹のさきがけである。徳川時代、即ち日本開闢以来、唯一の街路樹が、万世橋から浅草橋までの神田川南岸に植えた柳の並樹だが、柳原はいつしか着物の古蹟となって、当時の柳はほとんど全滅した。

三代将軍の時、春日局、どこで道草を喰ったものか、門限すぎに帰ってきた。供侍は情実的の声を張上げ、

「お局様の御帰館でござる。開門々々」

と呼ばわったが、平川門の門衛、

「お局様であれ、天照大神であれ、君命なき上は一寸たりとも開門すること罷りならぬ」

とばかりに一向取合わない。春日局仕方がないから濠端に駕をおろし、夜更まで寒風に吹かれ、将軍のゆるしを得て辛うじて入ることができた。寒い目に逢わされながら、門番の強情に感服して、お檜番に登用するように取做したのは、春日局、さすが雅楽頭よりも一枚上だ。

徳川時代に南北二つの町奉行所があって、町奉行は警視総監兼、知事兼、市長兼、裁判所長兼、大審院判検事といったほどの権限をもっていた。鉄道省が北町奉行所の跡で有楽座が南町奉行所の跡である。大岡越前守忠相が、当意即妙の判決で名をあげたのは世間に名高いが、大岡越前の外に、遠山左衛門という全身刺青だらけの奇抜な奉行がいて、竹を割ったような判決をやった。或る時調べの筋があり、吉原の花魁某を白洲に呼び出した。縁の高い座敷の中央に町奉行、その左右に判事、書記の如き属官が威儀を正して坐り、被告は、縁側から下の砂利の上に、蓆を敷いて坐らせられる。士分だけは縁側を許された。そこで花魁、ヒョイと裁判長を見るや、

「アラ金ちゃん」

とやった。金ちゃん事金四郎は、遠山左衛門が耽溺時代の名であるが、それを皆までいわせず、

「貴様まだ花魁をしているか」

と雷の如く大音声で叱りつけた。救世軍も自由廃業もない上に、落籍せる者がない以上、いつまで稼業をしていようと大きにお世話だが、この一言に花魁毒気を抜かれ、神妙に調べを受けた。

和田倉門向、辰の口評定所に並んで建てられた伝奏屋敷は、京都から下向の公卿を泊めた所、毎年それを接伴する高家、即ち臨時式部官が設けられ、浅野内匠頭はその一人であった。式部官長たる吉良上野介が、果して、

「鮒じゃ〳〵」

と毒吐いたか、どうかは証拠不充分であるに拘わらず、内匠頭が松の廊下で刃傷した故殺未遂は、梶川与曽兵衛、その他動かし難い証人があって、内匠頭は即日切腹、お国改易、それから義士の討入となった。吉良屋敷はその頃鍛冶橋門内、即ち久しく警視庁、鍛冶橋監獄のあった所がそれである。間もなく吉良は本所回向院裏松坂町の屋敷へ移って敵を討たれ、鍛冶橋の吉良邸跡は越前中納言源秀康の屋敷になった。秀康は権威赫赫、今なら昼食後の会社員が帽子なしで散歩するほどの所を、鍛冶橋から大手門まで毛槍、金紋先筥、数百の家来をつれ、

「下に〳〵」

と大層な行列で練ったのだから、なにさま身体も暇だったのだ。警視庁移転後は、東京駅構内に収用された。

九段坂界隈

文部省の前から竹橋を渡って入った所が、近衛の一二聯隊で昔の御蔵、上覧所、御鷹部屋などの趾である。正門に建てる北

白川能久親王殿下の銅像は、果した何を語る？　維新のはじめ上野戦争に輪王寺宮として墨染の衣に草鞋、甲掛で弾雨の中を落延びてより、明治二十八年、台湾征伐の陣中に薨去されしまでの、艱難多事の御生涯は、

「噫、おん悼わしや悲しやな、竹の園生の御身にて」

と琵琶の悲曲に千歳の恨をのこし、紐ばかりなる軍旗を拝するも、なかなかに涙のたねである。

半蔵門停留場を少し北へ行ったところから、五番町の停留場まで、即ち千鳥ヶ淵に臨む古い煉瓦塀は、英吉利の大使館で、維新までは南部丹波守、永井信濃守等の大名屋敷がつづいていた跡である。塀に沿うて五番町の方へ斜に走る小丘陵の上に枝を交うる桜の老木は、当時東京府知事たりし岡部長職子が、サトウ公使の客愁を慰めるために植えてやったのではなく、サトウ公使が市中の美観を添えるために、東京府へ寄附し、

「ヤこれは」

といって、岡部さんが遠慮なく貰ったものである。永田町、平河町、西久保巴町など、今では花のトンネルも殖えたが、千代田の松と反映しての美観で、やはりこゝが一等だ。あれからお濠の縁を二三回うねって、九段坂へうねり出た所は田安台と総称し、天正七年将門塚からこゝへ遷座した津久戸明神はしばらく田安明神と呼ばれ、元和二年今の牛込筑土八幡町に移ったが、牛込御門内、今の麴町富士見町にある榎の樹は、田安明神時代の神木だそうだ。

九段坂は、旧幕時代は今より数倍急峻で、山王祭の山車が田安門から城内へ練り込んでの帰るさ、山車の牛が馬鹿囃の拍子を取違えて足を辷らし、お濠の中へ墜落溺死したから、牛ヶ淵の名が起ったのだという。坂を上ったところに一名工の手になった鼓形石垣の、昔は新式で今は古典なる燈明台があり、維新前は二十六夜の月待に、男女老幼こゝへ集って、品川の海に龍燈のつくのを眺めつゝ、書写山の鬼若丸もどきのロマンスもあった。何しろ東京一の高台で、標高五百六十尺、品川からここまでの高さを、四回登れば、筑波山を越えてしまうそうだ。靖国神社の建つ前までは、この辺一帯屋敷ばかりで、東南の角には斎藤弥九郎という剣客の道場があって、市中三尺の童子も知らぬ者はなかった。靖国神社に祀られた護国の神は、十二万何千人、この内五十人ばかり女神があって、僧月照と大西郷とを、福岡平尾の山荘に密会させ、その後、

「玉という玉は砕けて世の中に、さらぬ瓦の輝くは何」

と採鉱冶金科の問題みたような歌で、「さらぬ瓦組」を冷かした野村望東尼などもその一人、男神の方では水戸の忠臣安島帯刀が、イの一番に祀られたのである。

靖国神社の馬場の中央に、大村兵部大輔益次郎の銅像が建ったのは、明治二十一年で、これが恐らく我が国銅像の先祖であろう。日本の陸軍創設者で、銅像の魁といえばひどくハイカラだが、ぶっさき羽織に野袴に草鞋がけ、頭へピストルをのせ——と某国公使が冷笑したのは丁髷のこと——上野の方を眺めている姿はあまりハイカラでもない。時は明治元年五月十二日、軍防判事大村益次郎は銅像そのまゝの姿で官軍の陣営を巡視した。黒門口は主力の衝突点とて、彰義隊も必死なら官軍も必死、必死のさいに余談だが、彰義隊の一味で、唯一の生存者は、林学博士本多静六の父晋老人である。その晋少年などがあまり暴れるので、官軍の隊長篠原国幹大タジタジとなり、大村兵部をつかまえて援兵派遣を請うたが、兵部いっかな肯かぬ。国幹気を苛ち、

「おはん薩藩を見殺しさるゝつもりでごわんすか」

と詰よったら、大村益次郎、一番番頭のような長い顔をたて

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com